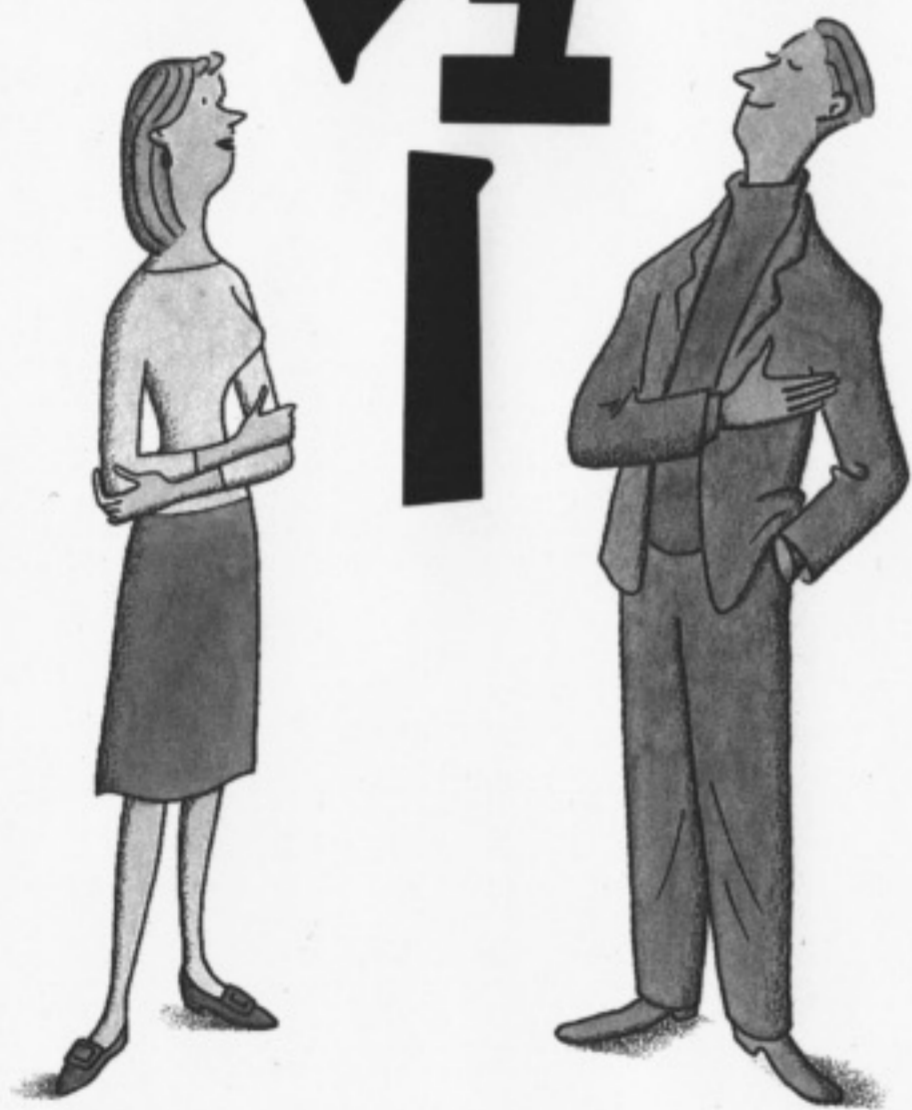


MONSIEUR
Jean-Philippe Toussaint

ジャン＝フィリップ・
トゥーサン

野崎歓・訳



集英社

ムツシユ一

三年前、今の職場に初めて出勤した日に、ムッシューには専用オフィスが与えられた。これまでのところ申し分なしだ。レオナルド・ダ・ヴィンチ・ビル十七階のその部屋は、広々として、天井も高い。青味がかかったガラスの嵌め込まれた大きな窓からは、街を見渡すことができる。二つの同型のスチールキャビネットにはさまれた仕事机には、左右に六段ずつの引き出しが付いていて、上にはいぶしガラスの分厚いテーブル敷きが敷かれていた。肘掛椅子は、ムッシューが何気なく試してみると、くるりと回転した。

それからの数日、ムッシュューは午前中の大半をオフィスの整理に費やした。キャビネットを順番に空にし、引き出しの中身をカーペットの上にあけた。それから、いろいろな書類を片っぱしから次々と取り分け、古新聞をビニール袋に突っ込み、古雑誌をまとめ、ドアを開けてすぐの踊り場に積み上げた。前任者が棚に残した本は箱に詰めて、代わりに自分の書類を並べた。

部屋は少しずつ片づいていった。二日目に彼はさっそくコーヒーメーカーを持ち込み、壁の一角、コート掛けの後ろにある、部屋でただ一つのコンセントにつないで、本を詰めた箱の上にとりあえず乗せた。コーヒーメーカーでいれ

るコーヒーはとてもおいしくて、いつでもいれたてのあったかさだ。毎朝一、二杯飲み、部屋に来る人にも必ず勧めた。

じきにムッシュューは、会社の一員としてまわりに溶けこんだ。同僚に対して控え目な態度を守りながらも、機会があれば、廊下での井戸端会議に伏し目がちに加わって、何やかやの問題について意見がたたかわされるのに耳を傾けた。それから、用があるので言い訳しながら、踵かかとを返してぶらぶらとオフィスに戻るのだった。背後に片手を伸ばして廊下の壁を撫でながら。

午前中、ムッシュューは一階に下りて、ガラス張りの大ホールで息抜きするこ

とがあった。受付嬢のいるカウンターをまわってカフェテリアに向かい、ポテトチップスを一袋、それもパプリカ風味のやつなんかを買って、ぶらぶらと歩きながら袋を開ける。組合のお知らせの前で立ち止まり、労働運動の歴史には結構くわしいので、掲示物をじっくりと読み、ときどきチップスをつまんだ。それから半回転して、もと来た方向にホールを横切り、途中でお客用のパンフレットを数種類収集していくつか斜め読みし、残りは、エスカレーターを待つあいだに、横のストールに乗っけてしまおう。

週に二回、ムッシューのメールボックスには、経済・金融関係の専門誌が山積みになって待っていた。オフィスに持ち帰って読む。次々にページを繰り、ときどき極細ロットリングペンで書き込みをしたり、あるいは切り抜いてビニ

ールケースに保存したりした。

午後にも、ほんとの話、ムッシューはまたカフェテリアに下りていくのだった。椅子にゆったりと腰を下ろし、ズボンの裾をたぐり上げると、ビールを一杯注文する。のんびりした時間帯で、ホールに人気のないこともしばしばだ。テーブルからは、大きな水槽が見えた。静かな連中が澄んだ水の中を行ったり来たりしていた。この時間、カフェテリアにはあまり客はいなかった。隣のテーブルでは、受付嬢たちが三、四人、アイスクリームを食べ、コーヒーを飲みながらおしゃべりしていた。

オフィスに戻る途中、エレベーターの中で専務とたまたま一緒になると、ムッシュューは、ボタンを押してあげるために、何階でお降りになるのですかと尋ねた。エレベーターが上がっていくあいだは、二人とも、壁のそれぞれ異なる箇所をじっと見つめていた。ムッシュューは目を伏せていた。専務の方は、キーホルダーをいじくっていた。時には、ごく慎重に会話をかわすこともあった。専務は、腕組みをして、注意深くムッシュューの言葉に耳を傾けていたが、はて、この男はいったい誰だったか、と自問し続けている様子がありありと見えた。

木曜日ごとに、ムッシュューは、専務を中心に、会社の幹部が大勢集まる会議に出席しなければならなかった。会議の時間はその階のホールに貼り出される通達で知らされ、場所の方はいつも同じ、長方形の部屋で、光沢のある楕円形

の木製テーブルがスペースを占領していた。それぞれの席の前には吸い取り紙のセットと灰皿が用意されていた。ムッシュューは左から十七番目の、経験上、一番目立たずに済むとわかった場所に腰を下ろす。それはデュボワ・ラクール夫人の隣の席で、彼の仕事の大部分を監督する立場にある夫人は、彼への質問に対してたいがい代わって答えてくれ、ムッシュューの方は、会議のあいだずっと黙ってタバコをふかしながら、彼女が後ろに身を引いた時には自分も後ろに身を引き、前かがみになった時には自分も前にかがんで、いつでも彼女の体を楯にするよう気を配り、自分の姿がはっきり表に立たないようにした。専務に声高に名前を呼ばれた時には、ムッシュューはびっくりしたように身を乗り出し、専務に向かって会釈してから、無駄のない、的確かつ専門的な、プロらしい語り口で即座に答えた。テキキッパキッ。それから、指を軽く震わせながら、隣の夫人の陰にふたたび隠れるのだった。会議はたいいてい、小一時間で終わる。専

務が閉会を告げると、みんなは立ち上がって、コートを着た。小グループがいくつかできる（あたくしのアヴァニトスを見なかったかしら、とデュボワ・ラクールが尋ねる、赤と金色の箱なんだけど）。

デュボワ・ラクールは、ときどき、書類を渡しに彼のオフィスにやって来る。ムッシュューは椅子を勧める。彼女は書類を手渡しながら、ありがとう、と言って脚を組み、書類のあるものの内容をかいつまんで話し、他のものについても注意を促して、概要を説明した。そしてさらに説明を付け加えてから立ち去るのだった。デュボワ・ラクールは、ありがたいことに、ムッシュューの仕事に対するまじめさをつゆ疑っていなかった。あなたっていつでもまるで何にもしてないような様子だわね、と彼女は折を見ては親しみのこもった調子で言い、そ

れこそが本当の働き者のしるしなのよ、となかなかうがった意見を付け加えた。

ムッシュューがオフィスに客を迎える時には、まず秘書が電話で客の到着を知らせてくれる。仕事机に向かって坐り、あるいは——こちらの方が気に入っているのだが——大きな窓ガラスの前にたたずんで、考えにふけりながら、ネクタイを結び直している、というポーズで客を待った。客が入ってくると、ムッシュューはコーヒーを勧める。カップの中でゆっくりスプーンをかき回しながら彼は、どうぞお掛けください、と言い、自分の指を眺めながら話を聞くのだが、協調的な態度は崩すまいと努めていた。とりわけ厚かましいやつは、鬚ヒゲの毛まで汗で濡らしたムッシュューをもう一度つかまえにやって来て、今度は正確な事実、数字、具体的な事柄を聞き出そうとねばるのだったが、そんな手合

いに対しては、彼は一覧表だの、グラフだのを送ると請け合った——知ったことじゃないよ、もう。そして相手が立ち去ってから、そのことを真剣に思案するのだった。

いろんな人が、いるもんです。

ムッシュューは週一度、夜、スポーツセンターで、あまり疲れない程度に室内サッカーに興じた。ロッカールームでは他の連中から離れたところで身づくろいする。着替えには時間をかける。彼のスポーツウェアは立派なもので、シャツは赤、天然素材のショートパンツに、靴は二重底のテニスシューズである。

一番後から体育館に出ると、他の連中と一緒にウォーミングアップを始める。それを十人ほどのウインドブレーカーを着た女の子たちが、タッチラインのところであれこれ批評しながら眺めている。ムッシュューはディフェンスなので、試合中、コーナーキックになるたびにバックして敵側のキックに備え、ヘディングでボールをカットするのに備えて体の力を抜いた。こら、でっかいの、そんなに前に出るな、とコーチが叫ぶ。かつては奇跡の名選手とうたわれた人である。ムッシュューは肩をすくめると、地面を睨みながら小走りに守備位置に戻るのだった。

ムッシュューは、少しでも自分と似たところのある相手はどうも苦手だ。嫌なのだ。例えば、手首をねんざしてしまったあの晩はどうだったかというとき、彼

はスポーツバッグを足元に置いて、新聞を読みながらバスを待っていた。隣に並んでいる一人のムッシュューが、何か彼に尋ねようとした。読みかけの記事に気を取られて答えずにいると、そのムッシュューは、控え目な笑みを浮かべて、もう一度聞き直してきた。我らがムッシュューは新聞を読むのを止め、ぼかんとしたままそちらのムッシュューを上から下まで眺めた。相手は間近に迫ってきて、突然、ムッシュューのことを突き飛ばした。バランスを失ったムッシュューは、バス停の囲いの鉄柱の角にもろに激突してしまったのだ。

その頃、ムッシュューは、婚約していた。

そうなのだ。宵の口にやって来た彼が軽い傷を負っているのを見て、フィアンセは心を痛めたに違いない。彼女はキッチンに氷を取りにいき、彼の額を撫でていたわりながら、腕をアイスペイルの中に浸すようにと言った。それから、ムッシュューが腕時計をはずしているあいだに、彼女はカーペットの上にあぐらをかいて坐りこみ、重苦しく押し黙ったままのムッシュューに代わって、雰囲気や和らげようと、男の人相についての彼の証言を頼りにモニタージュを作成し、万一のために玄関の壁に貼り出した。

ムッシュューのフィアンセは、この晩、彼に対してたいそう理解あるところを見せて、自分の寝室に折り畳みベッドを出し、ムッシュューが彼女の両親にできるだけあたりさわりのないよう苦心して事情を説明するあいだ、体を支えてやっ

た。御両親、すなわちパラン夫妻に初めて会った時、ムッシュューは、結構いい人たちだなと思ったのだが、今その夫妻は寢室の戸口に立って彼の方を覗き込んでいる。ベッドに腰を下ろしたムッシュューは、いざこざを避けたい一心から、お邪魔しているわけをわかってもらおうと、ゆっくり、落ち着いた口調で話し、納得してもらおうと試みた。だが二人はほとんど聞いていなかった。彼らがただただ知りたがっているのは、というのもそれがひどく怪訝けげんな事柄と思えたからなのだが、どうして娘は、自分たちの友人であるカラデック氏の似顔絵を玄関に掛けたりしたのか、ということだけであった。

翌日、朝まだ早く、音を立てないようにして廊下を進んでいたムッシュューは、フィアンセの母親とはちあわせしてしまった。ネグリジェ姿で完全な寝ぼけ顔

の母親は、びっくり仰天して、自分がどこにいるのかさえよくわかっていない様子だった。ムッシュューはそんな彼女に助け船を出して、手短に名を名のり挨拶したが、恥じらいを含んで目を伏せ、夫人のおなかのあたりしか見まいとしていた。というのもそれより下には、夫人の起きぬけのしどけないりのせいで、堂々たる茂みがまざまざと透けて見えていたのだ。よく眠れました？ 片手を自分の肩に置き、そっぽを向いて様子をとろつくろいながら彼女が尋ねる。ムッシュューは頭を振っていいえと返事し、夜のあいだに不気味なくらい腫れ上がってしまった手首を見せた。彼女は近づかずには眺めると、頼りない調子で病院とかレントゲンとか口にし、横を向いたままの恰好で少しずつ足を滑らせるようにして遠ざかりながら、浴室では、水洗の水に注意してくださいね、と言

い添えた（注意しますよ、とムッシュュー）。

アパルトマンの間取りがよくわからずしばらくまごついてから、ムッシューは、身づくろいを終え、ダークブルーのスーツに渋い色のネクタイを締めてキッチンに現れた。ズボンの折り目をびんと引っ張ってから、着席した。パラ氏はアンダーシャツ姿で椅子に坐り、タバコをふかしながら目の端で彼を観察している。ムッシューのフィアンセは、現在までのところまだ、睡眠中ということである。構うものか、彼ら、つまり母親とムッシューとは、彼女抜きで朝食を始めることに決めた。いいところを見せようとして、ムッシューは、手首の痛みもなんのその、自分から席を立ててコーヒーをお代わりしに行ったりした。

パラン夫人はネグリジェ姿のままだったが、その下にばかでかいパンティを穿きこんで来ていたので、もうバストしか透けて見えなくなっていて、コーヒーを飲んでいるムッシューにとってはやれやれというところだった。旦那さんの方は、コーヒーの受け皿にタバコを押しつけると、ムッシューに、単なる好奇心から、ひとつ手首を見せてもらえないか、と頼んだ。眼鏡をケースから出し、ゆっくりとかけてから、ムッシューに、君の腕がわたしの膝の上で自由になるように、その床のタイル張りのところにうずくまってくれないか、と言う。ムッシューがそのとおりの姿勢になると、パラン氏は骨のあたりを何となくまさぐり、しばし触診を続けたあげく、眼鏡をはずしながら心配そうな表情で、レントゲンを撮ってもらわなきゃならんな、これじゃあ全然わからんから、と宣告した。

レントゲン撮影なんぞまったくありきたりに行われていて、何の心配もないものであることはムッシューも重々承知だった。だから別に悩むことなく撮影してもらいにいったことだろう、もしそのために病院に行かなくてすむのだったら（病院はあまり好きじゃないのだ）。そこで、彼は腰掛け直しながら、パラン夫妻に、ひょっとしてこのアパルトマンの中にお医者さんは住んでませんか、放射線科のお医者さんか何か、と尋ねた。四階のドゥーヴル先生を別にすれば、いないわねえ、誰もいませんよ、という答えである。ムッシューが、ドゥーヴル先生には何か問題があるのかと尋ねると、パラン夫人は、いえいえ、御近所だっただけですよ、別にうちともめごとがあつたなんてことは全然ありませんから、と主張した。

パラン夫人がごく普段どおりの様子で食器洗いをしているあいだ、ムッシューはキッチンにいて何をすればいいのかわからず（自分のカップを片づけるくらいの手伝いはちゃんとした）、あちこちポケットを探っているいろいろな紙切れを取り出し、それを灰皿の上にかざして物思わしげな顔つきで燃やしながら、パラン夫人に、ドゥーヴル先生は往診をしに出向いてくれるだろうかと尋ねた。パラン夫人はちょっといらした表情になったが、それというのもこの質問にちゃんとした返事ができないためだろうと、ムッシューには思われた。知りたければ、電話してみりゃあいいじゃないの、と夫人が言った。

ムッシューは電話があまり好きじゃないのだった。